

1) ヨモギ=蓬

ヨモギはキク科ヨモギ属の総称で、世界には約 250 種ほどが知られ、広く分布する。多くのは多年草で、中には小低木もあり、葉や果実などが食用や薬用にされるものが多い。日本にはヨモギ属とニシヨモギ属があり、前者は本州から朝鮮半島にかけて、後者は本州の主に西日本から東南アジア、インドにかけて分布する。日本に自生するヨモギ属は約 30 種が知られ、その主なものはカワラヨモギ、オトコヨモギ、ヒメヨモギ、ヤマヨモギ、タカネヨモギなどである。ヨモギの中には砂漠や荒地などに育つ種もあり、これは風媒花で結実する。もともとが菊の仲間だから、本来は虫媒花のはずだが、進化の過程で虫などがあまり育たない、砂漠地方などに生存範囲を広げてゆくうちに、風媒花になったものと考えられている。また同一個体内では受粉せず、『自花不和合性』(04-02-00 参照)の植物である。繁殖は種子のほか地下茎により四方に広がって行く。葉は楕円形で細かく切れ込みが入り、裏面は白い綿毛で覆われている。高さは 50cm から時には 1m にも達し、夏から秋にかけて茎上部に、黄褐色の小さな頭上花を円錐状につけ、全草に芳香がある。和名の由来は灸に用いるところから『善燃草』(ヨモギ)の意味であるとも、よく萌え出る草であるところから『善萌草』(ヨモギ)であるとも言われている。別称も極めて多く地方によってモグサ、ヤキクサ、エモギ、モチグサ、ミチクサ、クサノハナなどとも呼ばれ、挙げていったらきりが無い。学名は『*Artemisia princeps*』で、属名はギリシャ神話の女神『アルテミス』に由来する。古代ギリシャではヨモギが婦人病に効果があるところから、当時から女神アルテミスの聖草とされていた。種小辞は最上のという意味である。イギリスでは『mugwort』と呼び、mug はマグカップのマグで、かつてホップの代用にされたことから、ビールのジョッキに因むものである。

しかしこの草は何といっても草餅の材料としての価値が大きい。餅につき込んで春先に食べる草餅は春が来たという喜びと同時に、冬を乗り切ってまた新しい一年を迎えたという意欲が沸いてくる。茹でて浸し物や和え物、天ぷらなどにも広く用いられる。湯をさして『蓬茶』(ヨモギチャ)とする地方もあり、利用法もさまざまである。漢方では、葉を乾燥させたものを『艾葉』(ガイヨウ)と呼び、煎じて健胃、下痢止めなどとして用い、汗疹や湿疹、かぶれなどには冷湿布すると良いといわれている。また浴湯料として用いると、神経痛、リュウマチ、肩凝りなどにも効果がある。この他にも乾燥させた葉を煙草のようにして喫煙すれば、気管支に良いとされ、喘息などの治療にも用いられた。乾燥させた葉はまたお灸の材料として利用され、この草の薬効には計り知れないものがあつた。民間療法では生の葉をよく揉んで汁を出し、虫刺されのときなどに用いると、効果があるともいわれている。しかしこのような数々の効能に恵まれながら、ヨモギは春の七草に含まれておらず、これは不思議と言わざるをえない。

ヨモギ類には独特の香りのあるところから、邪気を払う力が潜んでいるとの考え

方は、西洋にも東洋にもあり、ディオスコリデスは『薬物誌』の中で、古代エジプトのイシス神に仕える神官が、オリーブの替わりにヨモギを儀式に用いた、と記している。またプリニウスも『博物誌』の中で、古代ローマのマジ僧はヨモギを身に付けて、毒や野獣の害から身を守ったと記し、旅行の際にもこの草を携えて行けば、災難に遭わないとしている。中世のヨーロッパでも、魔術や呪術にヨモギが用いられ、庶民は夏至の前日にこれを摘んで編み、頭にかぶって病気や邪気を払ったとされている。アイヌもヨモギを呪術に用いており、魔除けの人形を作り、葉は湯がいて乾燥させて保存し、粟などと団子にしたり、若葉は刻んで粥にしていた。沖縄ではヨモギの粥を、フーチーバジュージと呼んでいる。

中国では6世紀に著わされた『荆楚歳時記』(ケイソサイジキ)には、5月5日にヨモギで人形や虎を作り、入り口にかかげて邪気を払ったことが記されており、この習俗は現在でも中国の中南部に残され、ヨモギの葉で身を清める風習がある。また中国の内モンゴル自治区、オロチョン族の好物料理は、ヨモギと獣肉の煮込みで、若菜を摘んで乾燥させたものを保存し、来客をもてなすときヨモギと獣肉のスープを作ったとされ、これは現在も続いている。こうした習俗は日本にも早くから伝わり、『万葉集』や『枕草子』の中にも、それとおぼしきものが見えている。『万葉集』には大伴家持の歌として、長歌1首が「余母疑」として記されている。

大君の 任(マ)きのまにまに 取りもちて 仕(ツカ)ふる国の… 杜鵑(トトリノ)

来(キ)鳴くさつきの 菖蒲草 余母疑かづらき 酒宴(カヅモ) 遊びなぐれど…

と詠んでいる。この長歌は地方に勤務していた者が帰ってきたときに、その労をねぎらって行なわれた宴席で詠ったものである。その意味は大君の任命にしたがって、任務を受けて仕えている国の…、杜鵑が来てなく5月の菖蒲草や、余母疑をかづらにして…というものである。ヨモギにまつわる習俗はすでにこの頃には中国から伝わっており、家持の歌はこれを反映したものであろう。

『枕草子』にもヨモギはしばしば取り上げられており、「節は」には

節は五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。

九重の内を初めて、いひ知らぬ民のすみかまで、いかでわがもとに

しげく葺かんと、葺きわたしたる。猶(ナ)いとめずらし。

と記しており、「5月5日の節句には、宮中の御殿を初め、みすぼらしい庶民まで、菖蒲や蓬を家々の屋根に掲げて、我が家こそと言わんばかりに葺いている様は、新鮮な感じがする」と言っている。しかし時代が下ると、ヨモギは浅茅や八重葎とともに、荒廃した邸宅を象徴する景物となり、『蓬生』という言葉も生まれた。『源氏物語』には、唯一、不細工な女として登場する『末摘花』(スエツムハナ)の、屋敷の荒廃を描いた「蓬生」の巻があり、光源氏はこの女に不憫さを感じ、終生この女の面倒を見ることになる。そして蓬という言葉のついた語は、どれも貧しさの象徴となって行くのである。



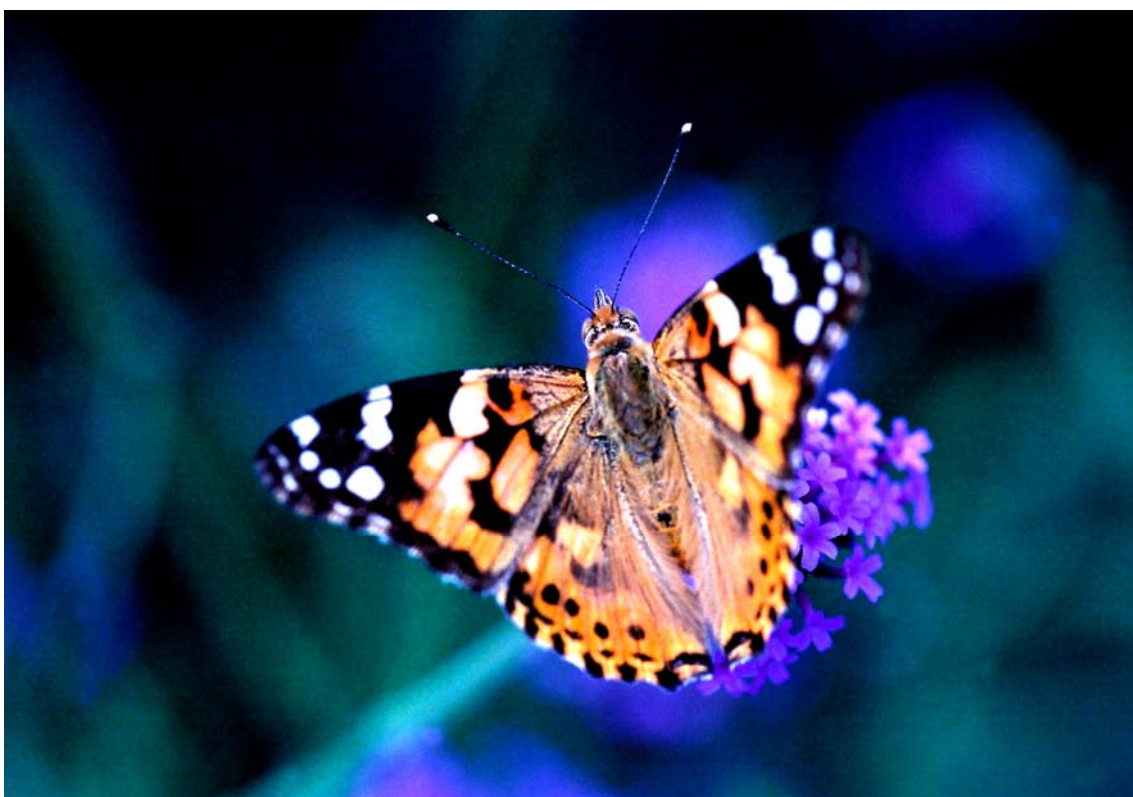
ヨモギの花穂、6月ごろになると人の背丈をはるかに越えるほどになる。これはまっすぐに上に伸びることが出来ずに、クネクネと横へ広がってしまった(東京都小平市薬用植物園)。



ヨモギの若い苗、そろそろかたくなって食べられなくなる(東京都小平市薬用植物園)。



斑入り葉のヨモギもある。なんともおいしそうではあるがこれは観賞用である(栽培品)。



ヨモギ、ハハコグサ、ヤグルマギクなどを食草として育つヒメアカタテハ。こうした雑草が豊富なのか、今ではアカタテハよりもヒメアカタテハの方が増えている(さいたま市浦和区)。

[目次に戻る](#)